

## ある自閉症児におけるコミュニケーション 関係と行動調整の発達

——行動調整を促す指導法への示唆を含めて——

### Development of Communication and Behavior Regulation in an Autistic Young Male: Suggestion to the Instructional Method of Behavior Regulation.

熊井正之<sup>1)2)</sup>・葉石光一<sup>3)</sup>・菅井邦明<sup>4)</sup>  
Masayuki Kumai, Kouichi Haishi and Kuniaki Sugai

#### I はじめに

話しことばをもつ自閉症児の多くにはエコラリアと呼ばれる独特の特徴がみられる。エコラリアとはエコ (echo) の形で産出される病的なことば (lalia) のことで、一般には「他者が話した語あるいは語群の無意味な反復」と定義される。エコラリアについてはこれまで自己刺激的なもの (Lovaas, Varni, Koegel & Lorsch, 1977<sup>3)</sup>)、コミュニケーションを阻害するもの (村上, 1993<sup>6)</sup>) といった評価がなされてきたが、近年、自閉症児におけることばの特異な獲得方法を反映するもので (Prizant, 1983<sup>9)</sup>)、発達の過程でコミュニケーション機能や行動調整機能などの種々の機能に分化していく (Prizant & Duchan, 1981<sup>7)</sup>; Prizant & Rydell, 1984<sup>9)</sup>) といった新たな捉え方もされるようになってきた。熊井 (1998)<sup>2)</sup> は、固執行動によって他者とのトラブルを起こしている事例 (A男) の行動観察を行った中で、A男が大人のことばがけに対するエコラリアを行動調整に利用しているとみられる場面を見出した。本研

究はA男の固執行動を軽減しようとする係わりの中で、A男の行動調整の変化を分析したものである。

行動調整は、ことばのもつ重要な機能の一つである。このことばの行動調整機能は、まず精神間機能として現われ、後に精神内機能として働くようになる。つまり、はじめは大人と子どもの間で交わされることばのやりとりを土台とし、大人のことばが子どもの行動を調整するというものであり、後に子ども自身のことばが行動を調整ようになる。こういった経過にみられるように、大人と子どものコミュニケーション関係が行動調整の発達の基礎として重要となっている。ルリヤ (1957)<sup>4)</sup> はこのことを、コミュニケーションの手段として発生したことばの意味のやりとりを土台にして行動調整は漸次的に発達していく、と述べている。

本研究は、一自閉症児の固執行動の抑制を目指した係わりの中から、特に筆者と対象児とのコミュニケーション関係に着目し、コミュニケーション関係の成立に伴い対象児の行動調整がどのよう

1) 東北大学大学院教育学研究科

2) 日本学術振興会特別研究員

3) 長野大学

4) 東北大学

に変化していったかを分析することを第一の目的とする。またこういった分析を通して、行動調整を促進する指導の手がかりを見出すことを第二の目的とする。

## II 対象児

対象は自閉症の男子、A男である。筆者がA男と係わり始めたのはA男が小学校普通学級に在学していた12歳の時であったが、本研究で取り上げるのは、A男が中学校特殊学級に在学していた13歳から14歳の時の行動である。

### 1. 生育歴

在胎期間は40週であり、帝王切開により出生した。生下時の体重は3210gであった。以下に、主な領域ごとの生育歴を記述する。

#### 1) 運動

定額は4か月、ハイハイは8か月、一人歩きは1歳2か月であり、運動面の発達に目立った遅れはなかった。

#### 2) 他者とのコミュニケーション関係

乳児期に、空腹でもぐずること、泣いて知らせることがない、甘えて泣く、あるいは抱かれたることがないなど、おとなしく手のかからない子であった。喃語がほとんどなかったが、始語は12か月と正常範囲であった。人見知りがない、視線が合わない、名前を呼ばれても振り向かないなどの特徴がみられた。2歳を過ぎてもことばは増えず、エコラリアがみられた。ことばが増え始めたのは3歳過ぎからであった。幼稚園では、他児と係われず一人遊びをしていることが多かった。一斉指示はほとんど通らず、集団行動も困難であった。好きな遊びはミニカー並べや水遊びであり、嫌いな遊びは砂遊びであった。

#### 3) その他の行動状況

1歳2か月で一人歩きができるようになると、外出時に突然いなくなることがあり、親はA男から目を離すことができなかった。他者へ向けたことばが増えない一方で、2歳半の時に数字が読めるようになるなど、発達の偏りが目立ち始めた。この頃から、数字、エレベータ、盲人用信号、踏切を見つけると近くに行き見入るという固執行動がみられるようになった。3歳前に、母親が異常

に気づき小児科に相談に行ったが、遊びが足りないだけで異常はないと判断され、外遊びをさせるよう指示された。保健所に相談したが経過観察となった。3歳健診後、デイケアセンターに一時期通所し、その後、幼稚園に入園した。この時期、自宅に入る直前に自宅前の歩道の決まった位置で立ち止まり特定の方向を見つめるという儀式的行動がみられた。また、A男の自宅から7kmほどの距離にあり母の車に乗って何度か訪れたことのある祖父母宅の近くで両親とはぐれてしまった時に一人で歩いて自宅まで帰って来ることができると、いつも通る道順のような一定の型にはまった事象の記憶は優れていた。

### 2. 取り組み開始直前(13歳の時)のA男の行動状況

#### 1) 日常生活・事物操作

身辺処理はほぼ自立していた。買い物の際、多くの商品の中からの選択、釣り銭計算が困難であり、部分的な介助を要した。道順を覚えるのは得意であった。公共交通機関を利用する時には、運賃支払いの介助等が必要であった。列車用信号の変化に興味があり、信号の変化を見ようとして駅のホームで走り、周囲にいた人を突き飛ばしてしまうことがあった。A男及び周囲の人の安全のために同伴者の配慮が必要となることもあった。

日常生活用具の機能的操作は可能であり、ビデオ等の複雑な操作を好んで行った。みたて・ふり操作を自発的に行うことはないが、周囲の者が要求すれば遂行可能であった。事物の操作に特別な問題はみられなかった。

#### 2) 他者とのコミュニケーション関係

体調が悪く横になっている母親を気遣って話しかける、あるいはA男と共に運動し、疲れている筆者に「Kさん、疲れた？」と尋ねるといったように他者の状態を理解して係わる様子がみられた。うまくできたことを褒められるとその人に笑顔を向けること、うまくできたことへの称賛を母親に要求することもみられた。しかし全般的に自分の感情を自発的に他者に伝えることは少なかった。一方で、自宅のみならずレストランやデパートのトイレの個室をドアを開けたままで利用し、人に見られても気にする様子がないなど、他者の

視線を意識した行動の欠如がみられた。

日常的で具体的な内容について、応答の選択肢を示しながら話しかけた場合、「はい、いいえ」で答えられる形式、あるいは、「いつ」、「誰（何）が」、「誰（何）に」、「誰（何）を」、「何処に」という形式で話しかけた場合には応答が可能であることが多かった。応答の選択肢を与えなかった場合や「何故（どうして）」という形式で話しかけた場合には、即時エコラリアや文脈に適合しない発話のみられ、無反応のことも少なくなかった。自発的発話は量的に少なく、「Kさん、野球（を見に行きたい）」、「お母さん、バター（取って）」など具体的要求の伝達や、テレビ番組の司会者名や提供会社名、仙台ハーフマラソンの各年の優勝者名、エレベータ、車や電車のスピード（メータ）、クイズやゲームの得点数、信号、ボタンの色や材質など特定の内容に関するステレオタイプな質問が大半であった。こうしたA男の好みの内容について他者が話しかけた場合は応答が可能が多く、その応答は話しの文脈を大きく外さないものであった。しかしA男の好みの内容ではない話題について話した場合は無反応、又は文脈に適合しない発話や即時エコラリアのみられた。発話は単文節から多文節文までみられたが、その中には、一人称と二人称代名詞の混乱、やりーもらい関係の逆転、能動一受動表現の逆転、助詞ぬぎ発話、助詞の誤用がみられた。発話の多くはアクセント、イントネーションが不明確で一本調子なものであった。

A男が特別に好んでいるメータ、数字、テレビ番組キャラクターに関係した内容であれば他者からの遊びの誘いに従うのみならず、自ら母親や筆者に働きかけてくることもあった。しかし好みの内容でない場合、誘いに全く反応しないことが少なくなかった。

### 3) 固執行動

A男は洋服のボタン、車・オートバイ・電車・自転車のメータ、踏切の警報機・列車用信号、盲人用信号の音、テレビアニメのキャラクター、エレベータといった事物に固執行動を示した。これら固執事物に対する行動が発現した時には、他者の表情や話しかけに頓着せずに見入る・触るなど他者への配慮が極度に欠ける、あるいはそれまで行

っていた行動が遮られてしまう傾向にあった。

ただし頻度は低いものの、A男にはこれら固執事物のうち踏切の警報機音・盲人用信号の音に対し耳ふさぎをすることで行動の流れを遮断しないようにするということもみられた。またメータに対する固執場面において、A男に向けた筆者のことば掛けの一部分をイントネーションまで似せてA男自身が繰り返し外言化（即時エコラリア）しながら固執行動を抑制することが希にみられた。

### 4) 知能検査の結果

WISC-Rによる測定の結果、言語性知能指数は47、動作性知能指数は69であり、両者の乖離が大きく動作性優位であった。下位項目の評価点は言語性課題はいずれも1と低く、特に類似・単語・理解では検査者の教示・質問の即時エコラリア、場面と無関連のことばのみみられたのみであった。動作性課題では絵画完成・積木模様・符号の評価点がそれぞれ6、8、8、絵画配列は1であった。

## III 他者とのコミュニケーション関係と行動調整の変化

筆者がA男のことばの問題に取り組む以前、A男には特定の事物への固執行動に起因する行動調整上の問題がみられ、しばしばそれらが他者とのトラブルを引き起こしていた。そこで、トラブルを引き起こしている固執行動の抑制（行動調整の促進）を目標とした関わりをもつことにした。この係わりは、A男が13歳から14歳であった11カ月間に行った。1回あたり2時間から3時間の遊びを通した係わりを、週1回から2回の割合で行った。

11カ月間の係わりの過程は大きく4つの時期（第1期：取り組み開始から2か月目まで、第2期：3か月目から5か月目まで、第3期：6か月目から9か月目まで、第4期：10か月目から11か月目まで）に分けられた。以下に、それぞれの時期におけるA男の様子を、時期ごとの係わりの方針とともに記述する。表1は、各時期のA男の状況をまとめたものである。

1. 第1期(やりとりの内容が固執事物に限定されており、かつ直接的に行動を規制することば

表1 A男のコミュニケーション関係と行動調整の変化

	他者とのコミュニケーション関係	行 動 調 整
第 1 期	<ul style="list-style-type: none"> <li>意味不明な発話か、固執事物に限定されたステレオタイプな発話がみられた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>行動を直接的に規制することばの効果は小さかった。</li> <li>いったん固執事物についての話題を共有した後、行動を別の方向へそらすという方法が効果的であった。</li> </ul>
第 2 期	<ul style="list-style-type: none"> <li>基本的に第1期と同様であった。</li> <li>A男からはなしかげが増加したため、他者とのやりとりの量が増加した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>行動を直接規制することばがけを即座に繰り返し(即時エコーリア)、行動の調整に利用できるようになった。</li> </ul>
第 3 期	<ul style="list-style-type: none"> <li>話題に広がりが見られるようになった。</li> <li>かけことばを用いたことばのやりとりを楽しみながら主導して行った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>固執行動を規制することばを期待した質問を発し、それに対する答えに従って行動を調整した。</li> <li>他者の質問に答え、それに従って行動を調整した。</li> </ul>
第 4 期	<ul style="list-style-type: none"> <li>第3期以上に話題の広がりがみられた。</li> <li>他者から返ってくるであろう答えを期待した質問を頻繁に行った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>少なくとも他者のことばの意味に従った行動の調整はできた。</li> <li>いつも他者の口から発せられる、行動を規制することばを自分から発し(遅延エコーリア)、行動を調整した。</li> </ul>

がけの効果小さい時期)

### 1) 係わりの方針

この時期のA男の行動は固執事物に向かうものが多く、発話内容も固執事物に限定されたステレオタイプなものが多かった。固執事物に関わらない話題については、コミュニケーション関係を形成することが困難であった。そこでこの時期には、A男の興味や関心にそった働きかけを通して円滑なコミュニケーション関係を築くことを第一の目標とした。これは、大人と子どもの共同活動の場である指導場面においては、円滑なコミュニケーション関係の成立が活動へ向かう子どもの能動性を高めるとされていることによる。具体的には、A男が固執行動を示した時に直接的に固執行動の抑制を促すことばがけをせずに、まず目の前にある固執事物を話題としてやりとりし、その上で抑制を促すことばがけを行う、あるいは目の前にある固執事物以外の事物に話題を移すことばがけを行うこととした。

### 2) 他者とのコミュニケーション関係

A男からの発話は、量自体が少なく、内容は固執事物に限定されたステレオタイプなものが中心であった。例えば「仙台ハーフマラソン、優勝は?」、「信号、赤で渡っていいか?」のように内容と形式の決まった質問である。また、他者にとって意味不明な発話も少なくなかった。例えば筆者と一緒にトランプをしていた時にA男が発した、「はいどうぞ(と筆者にカードを渡してから)ねえニュークレラップ、Gさん(お手伝いさんのこと)ねえ、Gさんねえ、ニュークレラップ、はい、簡単でしょ、ランナー、シートベルト、コマージュだねえ、30、36、宮城、リモコン12チャン捨てちゃった、あー、あーらー、マラソン大会とっちゃった、かえる、かえるがなくかーらー、6万キロもランナー疲れちゃる、せいぜい5分くらい、2分は?」といったものがそれである。

### 3) 行動調整

直接的に行動を規制するようなことば(例えば「～しちゃ駄目だね」、「～しないね」)の効果は小さかった。駅のホームで列車用信号を見るために

走り出して人を突き飛ばしそうになった時(列車用信号はA男の固執事物のひとつである)に、強い口調で直接的に行動を規制したことがあったが、そういった場合、行動は規制されるものの、後で激しい感情の表出や行動の混乱がみられた。むしろA男の行動を調整する上で効果的であったのは、いったん固執事物に対する話題を共有し、その後行動を他へ切り替えていくような働きかけ、話しかけであった。例えばA男が見知らぬ人のバイクのメータを覗き込んでいた時には、「格好良いメータだね。今、何キロになっている？」というようにA男の興味の対象となっているものの話題でやりとりした後、「そうだ、Kさんの車のメータ何キロになっているか見に行こう」と、目の前の固執事物から他の物へと話題を変える働きかけ、話しかけを行った。こういった場合、A男はスムーズにその場を離れることができ、結果的に固執行動を抑制することができた。

## 2. 第2期(やりとりが量的に増加し、かつ行動を規制することばがけの即時エコリアが固執行動の抑制に利用され始めた時期)

### 1) 係わりの方針

係わりの基本的な方針は第1期と同様であった。ただし緊急時に行った、直接的に行動を規制するような強い口調の声がけはA男に混乱を引き起こしたため、極力避けるようにした。その代わりに、例えば駅のホームなど人込みにてかける時には、気をつけなければならないことを意識させるようなことばがけを行った。

### 2) 他者とのコミュニケーション関係

A男からの自発的発話の性質は、基本的に第1期と変わっていない。つまり固執事物に限定された内容で、ステレオタイプな発話が多く、また他者に伝わりにくい意味不明の発話がみられた。第1期との違いとして指摘できるのは、そのような内容であれ、他者とのやりとりの量的な増加がみられたという点である。この量的増加は、筆者からの話しかけではなく、A男からの話しかけの増加によるものであった。

### 3) 行動調整

この時期になると、行動の規制を直接的に促すようなことばがけが、次第に効果をもつようにな

ってきた。この時のA男の様子は、そういった他者からのことばをその場で繰り返す(即時エコリア)ながら、自らの行動を調整するというものであった。例えばA男が見知らぬ人の車のメータを覗き込んでいた時、筆者が「A男、知らない人のメータ覗いちゃ駄目だねえ」と言うと、A男は筆者のことばのイントネーションまでも真似て「駄目だねえ、駄目だねえ」と繰り返す言いながらメータから離れることができた。

## 3. 第3期(やりとりの内容が固執事物以外に広がり始め、かつ行動を規制することばがけを期待した質問を筆者に向けてくるようになった時期)

### 1) 係わりの方針

この時期のA男の発話内容は、固執事物に限定されていた第2期までのものと違い、次第に広がりをもったものになってきた。これはA男の興味や行動の幅の広がり土台となっていると考えられた。A男の興味や行動の幅の広がり、物事の因果関係の理解などにも及ぶようになってきたため、この時期には係わりの幅を広げていくことを心がけた。例えば、自分の固執行動と、他者との間に起こるトラブルの因果関係をA男が意識できるよう、直面している状況の説明をしながら行動を規制するというように、行動の規制の意味を伝えるように努めた。また駅のホームなどでかける時には、これからの予定を話し見通しをもたせた上で、気をつけなければいけないことを意識させるように努めた。

### 2) 他者とのコミュニケーション関係

第3期以前のA男の発話内容は固執事物に限定されていたが、上述したようにこの時期にはA男の発話の内容が広がりをもつようになってきた。また、ことばを通して他者と係わりをもつことに興味をもち始めたと思われる行動が現れるようになった。例えば「中正漢方胃腸薬あるか? (大正漢方胃腸薬と大一中ということばをかけている)」、「スプーンダンスあるか? (フォークダンスとかけている)」ということば遊び的な話しかけを自発的に行うようになったことがあげられる。この時のA男は、相手からの応答の内容をあらかじめ予想し(「そんなものないねえ」、「大正

漢方胃腸薬だねえ」などの答え)、予想通りの答えが返ってくるのを期待しているようであった。こういったやりとりは固執行動に際してもみられ、固執行動を規制することばがけを期待した質問を筆者にむけてすることがあった。例えば人の服のボタン(A男の固執事物のひとつ)が目についた時にA男は「ボタンエッチいいか? 知らない人のボタン触ったらば?」と筆者に質問するようになり、筆者の「駄目だねえ」、「そんなことしたら捕まっちゃらねえ」という期待した通りの応答が得られると声を立てて笑った。

### 3) 行動調整

この時期のA男は、規制しなければならない固執行動を理解し、これらを自ら抑制し得るようになってきた。その際の行動調整には2つのパタンがあった。つまり1) 行動の規制を促すことばがけを期待した質問をA男から発し、それに対する他者のことばに従って行動を調整するというもの(例えばバイクを目にした時にA男は「Kさん、知らない人のメータ触ったらば?」と質問し、それに対する筆者の「駄目だねえ」ということばに従ってメータを覗く、あるいは触るという固執行動を抑制できた)、2) 規制すべき行動を意識させるために他者が発した質問に答え、その答えに自らの行動を従わせていくというもの(例えばアニメーションのキャラクターが描いてある鞆を持っている幼稚園児に突然近づき、間近で見入った時、筆者が行った「あれっ、A男は幼稚園生だけ? 違うよな、A男はもう幼稚園生じゃないよな?」ということばに「もう幼稚園じゃないね」と答えながら固執行動を抑制できた)である。

## 5. 第4期(やりとりの内容が固執事物以外に広がり、かつ行動を規制することばがけの遅延エコーリアが固執行動の抑制に利用され始めた時期)

### 1) 係わりの方針

この時期の係わりの方針は基本的に第3期と同様であった。つまり自分の固執行動と、他者との間に起こるトラブルの因果関係をA男が意識できるよう、直面している状況を説明しながら行動を規制するというように、行動の規制の意味を伝えるように努めた。

### 2) 他者とのコミュニケーション関係

この時期のA男には、以前みられた意味不明な発話がほとんどみられなくなっていた。第3期にみられた、かけことばによる他者とのことばのやりとりはみられなくなっていたが、それはむしろ他の内容に話しの範囲が広がったためとみられた。例えばA男は「テレビ、ガチャガチャしてたらば?」、「おいしい水あるかなあ」というような、今までにみられなかった話題の質問をするようになった。固執行動を規制するためのことばがけを期待した質問は、第3期よりも多くみられるようになった。

### 3) 行動調整

この時期のA男は、まず少なくとも、行動を規制する他者からのことばに従った行動調整をかなり確実に行えるようになっていた。これは第3期で述べた、他者のことばを繰り返しながら(即時エコーリア)、それによって行動を調整するというものである。第4期には、これに加え、以前他者から発せられた、行動を規制することばを自分から発し(遅延エコーリア)、それに行動を伴わせるということがみられるようになってきた。例えば幼稚園児の持っている鞆の絵を気にしながらも、自分から「もう幼稚園じゃないねえ、もう幼稚園じゃないねえ」と繰り返しながら固執行動を規制することがあった。

## IV 考察

### 1. コミュニケーション関係と固執行動抑制の変化

A男と筆者とのコミュニケーション関係の目立った変化は第3期に現れた。第2期まではA男の発話内容は固執事物に限定されたステレオタイプなものであったが、この時期にはまず発話内容に広がりが見られるようになった。またそれまで一方向的になりがちであった関係が、かけことばを用いたことばのやりとり関係という双方向的なものに変化した。この時のコミュニケーション関係の主導権はA男にあり、発話に対して筆者や母親が答えを返すとA男は笑って喜ぶという情動表出を示した。ザポロージェツ・リシナ(1974)<sup>14)</sup>はコミュニケーション欲求を示す指標として、他者の働きかけに対する情動表出、相手の注意を引く

ことを目的とした率先的行為をあげている。これらは、自分の発話に答えが返ってきた時にみられた喜びの表出、やりとり関係を主導する態度にあてはまるものである。こういったことから、第3期にみられたコミュニケーション関係の変化は、A男のコミュニケーション欲求の高まりを示すものと考えられる。この時期の行動調整の様子をみると、A男は他者のことばをその場で繰り返して(即時エコラリア)固執行動を抑制することができるようになった。行動調整の発達は、まず大人のことばにそった行動の調整が出来ることから始まり、その後漸次、子ども自身のことばにそった行動の調整が出来るようになっていく(ルリヤ、1979<sup>5)</sup>)。行動調整の一般的な発達にみられるように、その過程にはコミュニケーションの手段として発生、使用されることばの意味のやりとりが重要な役割を果たしている(ルリヤ、1957<sup>4)</sup>)。意味不明な発話が減少し、筆者とことばのやりとりを楽しむことができるなど、コミュニケーションに意味のやりとりという性格がみられるようになってきたことが、A男の行動調整の発達に関連していると考えられる。A男の行動調整のありようは、その後第4期に入り、他者のことばに規範を求めるといものから、自分のことばに従ったものへと徐々に変化しつつあるとみられた。これは、いつも他者から与えられる、行動を規制することばを遅延エコラリアとして自分から発し、行動を調整するというところにみられている。遅延エコラリアは一定時間記憶されたことばを時間的に隔たりのある場面で発するものである。他者のことばによるものではあるが、遅延エコラリアによる行動の調整は、ことばを用いる意図がA男自身にあり、即時エコラリアによるものよりも主体的性格を有しているといえ、自らのことばの意味に従った行動調整に今後つながっていくものと考えられる。この時期のA男には、それまでにない話題に関する発話がみられるというように、他者とのコミュニケーション関係の成立がより一層すすんだとみられる変化が現れていた。このことから、行動調整において他者とのコミュニケーション関係が重要な役割を有していることをみてとることができよう。

## 2. 行動調整を促す指導に対する示唆

行動調整の初期段階は他者のことばにそって行動するというものであり、いうまでもなくこれには他者とのコミュニケーション関係の成立が重要な役割を果たしている。またそもそもコミュニケーション関係は、大人と子どもの共同活動場面において活動へ向かう子どもの能動性を高める(ザポロージェツ・リシナ、1974<sup>11)</sup>)とされている。このことは、どのような指導であれ、大人と子どもの共同活動として展開されるものには、基本的に両者のコミュニケーション関係が必要とされることを意味している。つまり、行動調整を促す指導には、指導一般の原則からも、また行動調整の基本的性格からも、コミュニケーション関係が土台として必要であるといえる。実際、A男の固執行動の抑制は、筆者とのコミュニケーション関係が形成されたことと同時期にみられた。そのように考えた時、第1期、第2期で筆者が行った働きかけの重要性を指摘しておく必要がある。この時期には、固執行動を即座に規制するのではなく、いったんそれに関して話題を共有するという関係作りをした。頻度は高くないながらも第1期からみられていたステレオタイプな質問を繰り返す行動(いわゆる「質問癖」)には、コミュニケーションを求める意味があると考えられている(Hurig, Ensrud, & Tomblin, 1982<sup>12)</sup>)。第1期、第2期では話題の共有という形でこのコミュニケーションを求める気持ちを受容したことが、A男のコミュニケーション欲求を高めることにつながったと考えられる。第1期から第2期にかけてみられた質問を繰り返す行動の頻度の増加は、このような働きかけがA男とのコミュニケーション関係を形成する基礎として大きな意味を有していたことを示すものである。

また自閉症児に特異的な内容ではあるが、エコラリアの意味を捉え直すことが必要であると思われる。当初みられた発話意図不明のエコラリアは、筆者とのコミュニケーション関係の形成とともに固執行動の抑制に利用されるようになっていった。自閉症児のことばはエコラリアという独特の形で獲得されていく(Prizant, 1983<sup>9)</sup>)という指摘など、近年エコラリアはコミュニケーション機能を有するものとして捉え直されるようになって

た(Prizant & Duchan, 1981<sup>7)</sup>; Prizant & Rydell, 1984<sup>9)</sup>; Prizant & Schuler, 1987<sup>10)</sup>)。本研究で取上げた事例の観察結果は、エコラリアがコミュニケーション機能を有しているとする知見からさらに発展して、それを土台とした行動調整機能を有していることを示唆するものといえる。ただし、あらゆるエコラリアが行動調整機能を有しているとはいえない。A男においては、エコラリアが行動調整機能をもつようになる背景、つまり筆者とA男とのコミュニケーション関係が必要条件のひとつと考えられた。今後、他の事例の観察も蓄積しながら、エコラリアが行動調整機能をもつようになる条件の検討をさらに進める必要がある。

(1998. 3. 31 受理)

#### 謝 辞

本研究を進めるにあたり、ご理解とご協力をいただきましたA男君とそのご家族に深謝いたします。

#### 文 献

- 1) Hurig, R., Ensrud, S. & Tomblin, J., The communicative function of question production in autistic children, *Journal of Autism and Developmental Disorders*, Vol. 12, pp.57-69. 1982.
- 2) 熊井正之「自閉症児における刺激の過剰選択性と固執反応との関連、及びそれらの抑制を促す指導法に関する検討」(『東北大学教育学部研究年報』第46集、pp.205-220, 1998年)。
- 3) Lovaas, O. I., Varni, J. W., Koegel, R. L. & Lorsch, N., Some observations on the nonextinguishability of children's speech, *Child Development*, Vol. 48, pp.1121-1127, 1977.
- 4) ルリヤ, A. R.『言語と精神発達』(松野豊・関口昇訳) 明治図書、1957年。
- 5) ルリヤ, A. R.『言語と意識』(天野清訳) 金子書房、1979年。
- 6) 村上由則「エコラリアを示す子どもの指導について」(松野豊編著『発達障害学の探求』文理閣、pp.164-175, 1993年)。
- 7) Prizant, B. M. & Duchan, J., The functions of immediate echolalia in autistic children, *Journal of Speech and Hearing Disorders*, Vol. 46, pp. 241-249, 1981.
- 8) Prizant, B. M., Language acquisition and communicative behavior in autism: Toward an understanding of the "whole" of it, *Journal of Speech and Hearing Disorders*, Vol. 48, pp.296-307, 1983.
- 9) Prizant, B. M. & Rydell, P. J., An analysis of the functions of delayed echolalia in autistic children, *Journal of Speech and Hearing Research*, Vol. 27, pp.183-192, 1984.
- 10) Prizant, B. M. & Schuler, A. L., Facilitating communication: Language approaches. in Cohen, D. & Donnellan, A. ed., *Handbook of autism and pervasive developmental disorders*, New York: Wiley, pp.316-332. 1987.
- 11) ザポロージェツ, A. B.・リンナ, M. I.『乳幼児のコミュニケーション活動の研究』(青木冴子訳) 新読書社、1974年。